

司会の言葉

細山田 明義*

谷口会長のご指名により、信州大学小山教授と若手研究者シンポジウムの座長を務めさせていた。本シンポジウムは、会長のアイデアにより、日常の臨床を通して、循環器学に興味をもち研究されている、新進気鋭の若手の研究者の皆様へ演題を応募していたゞき、発表したなかから、優秀演題を選び、その研究発表者に対して優秀賞を差し上げるということであった。優秀賞の決定には、選任された数名の先生方に、選定委員として発表会場で、演題発表ごとに点数化していたゞき、それを集計して、もっとも点数の高い発表者に優秀賞を授与することとなった。発表者は6名で、各自、発表時間15分、討論時間5分で進行することにした。前半3題を私が担当し、後半3題を小山教授にお願いした。まず、聖マリアンナ医大内科・鮫島先生は、心筋梗塞回復期の運動処方に用いられる anaerobic threshold レベル単一負荷によって起こる、呼吸循環動態の変化について、健常者を対照に比較検討され、呼吸パターン、換気当量、血中ホルモン動態に差が生じることを述べられた。群馬県立循環器病センター内科・磯部先生はPTCA バルーン拡張中の心筋虚血が局所心機能に及ぼす障害を心電図 ST 上昇の程度と関連させて検討され、ST が0.2 mV 以上上昇する例では、0.2 mV 以下の例に比較して、高度の壁仕事量の低下を伴うことから注意が必要であると結論された。独協医大越谷病院外科・村井先生はイヌの実験成績から、開心術後の心筋代謝に関し、甲状腺ホルモン授与が虚血後の心臓に対して、濃度依存

的に冠血流量を増加させ、ブドウ糖、乳酸の摂取量を充め、代謝効率を充める可能性のあることを示唆された。防衛医大麻酔科・高松先生は、加齢が血管の収縮や弛緩反応にどのように影響しているかを、ラット胸部下行大動脈血管輪を用いた実験結果から、内皮依存性弛緩反応を検討し、EDRF/NO を介した弛緩反応は加齢によって増加するが、サイクリック GMP 以下の弛緩反応には変化はみられないだろうと述べられた。京都大学麻酔科・北村先生は、ラット胸部大動脈輪を用い、ベラパミル、フェニレフリン投与後に生じるイソフルランの血管平滑筋収縮機能をリアノジン処置標本を用いて検討され、イソフルランによる血管収縮は受容体作動性カルシウムチャネルを介しての細胞外から細胞内へのカルシウム流入によるものと結論された。九州大麻酔科・山浦先生は、プロポフォルがチアミラールに比較して血圧低下が生じやすい原因を、経胸壁心エコー図によって検討され、左室の前負荷、後負荷の低下が、チアミラールより大きいことが一因であることを示された。慎重な審査の結果、優秀賞の金一封は京都大麻酔科・北村先生が授与されたが、どの発表も優れ、また、通常と少し違った雰囲気の中で、発表者、会場、座長もいさゝか、緊張気味であった。このアイデアは若い人達の研究発表の場として、その意欲を益々高揚させるとともに、学会の活性化に大きな意義があるように思われた。このようなシンポジウムを通して、より高度で優秀な研究が生まれることを期待するものである。

*昭和大学医学部麻酔科